

依存できる「家族」を求めて

—インド・クンブメーラー祭における女性行者の親密ネットワーク—

濱谷真理子

1 はじめに

1-1 本論文の目的

本論文の目的は、男性優位のインド・ヒンドゥー修行者の世界で生きる女性行者が、どのように自己の生きる場や生きる喜びを獲得しようとしているかを、明らかにすることである。本稿では、インド及び世界各地から修行者の集まるクンブメーラー (Kumbh Melā) 祭を舞台に、「家族」と意味づけられる親密ネットワークに着目し、女性たちがいかにそれらに依存しつつ積極的に活用し、女性が生きやすいように関係性を再構築しているか、そのやり方を検討する。

1-2 問題とパースペクティヴ —女性と「家族」—

これまでのインド女性研究では、女性が象徴的には理想化される一方で、現実世界では私的領域に閉じ込められ、夫や男性親族への奉仕・服従を強いられるなど、抑圧・差別されてきたことが問題となってきた¹。それらは主に家住女性を対象としてきたが、世俗を捨てたはずのサードウ (sādhu: ヒンドゥー修行者) の世界でも同様のことがいえる。

執筆者紹介

はまや まりこ ●日本学術振興会特別研究員 (PD)、京都大学東南アジア研究所 文化人類学

- ・ 濱谷真理子、2011、「サードヴィーとして生きる—現代インド社会における奉仕実践と師弟関係の一考察—」、『現代インド研究』、1、145-157 頁。
- ・ 濱谷真理子、2009、「『乞食遍路』の生活誌」、『徳島地域文化研究』、7、103-119 頁。

男性が圧倒的多数を占める修行者の世界で、少数²の女性行者 (*sādhvī*) が研究者の注目を集め始めるのは、1980年代以降のことだ。フェミニスト的視点からなされてきた議論の多くは、そのほかの宗教と女性をめぐる議論 [川橋・黒木 2004] と同様に、主に女性が宗教によって抑圧されているか／自律・自由を獲得できるかが、問題とされてきた。たとえば、女性行者研究の先駆者であるオジャは、修行者の世界でも世俗社会と同様に女性は男性に従属して生きていかねばならない現状を問題視する一方、少数ではあるが周囲の尊敬を集め権威をもつ女性グルが存在するなど、女性は（部分的ではあるが）自由を得ることができるとも指摘した [Ojha 1981, 1985]。また、カンデルワルは、インドでの女神崇拝の伝統を背景として女性が「母＝女神」として尊敬されていることに着目する。彼女は、女性行者もまた理想的な「母」であると自身を強調したり、母のように他者をケアしたりすることで、スピリチュアルな優位性を獲得しようと議論した [Khandelwal 1997, 2004]。近年の研究では、デ・ナポリが、女性行者の信愛の語りや歌に着目し、愛や奉仕を重視する女性の修行主義が、男性優位の正統ブラフマニズム的修行主義³へのオルタナティブとなりうると指摘する [De Napoli 2009]。

その一方、従来の研究がとりあげてきたのは比較的高カースト出自で教養ある女性たちで、女性行者のなかの階層や格差には充分配慮してこなかった⁴。抑圧／自律をめぐる議論は、そうしたいわば一部の「エリート」女性行者に着目する、恵まれた特権的な立場にある研究者自身の視点からなされてきたものではなかったか。本稿でみていくように、女性行者の多くは、関係性に依存し、男性に従属し、それを修行や義務として受け入れている。その実態は、近代西欧的な考えにおける「自律」とはほど遠いかもしれない。しかし、ジュディス・バトラーが、「だが、政治的エージェンシーの前提条件として自律した主体を重視することは、私たちをもっと根底のところで結び付けている依存の様態——私たちの傷つきやすさと親密さと集団的抵抗の源となる、この依存の様態——を消去してしまうことにはならないだろうか」[2007: 94] と問いかけるように、依存の様態はそれ自体、特別な意味や可能性を有しているのではないだろうか。本稿では、女性行者内部の階層性や周縁化の問題に注

意しながら、彼女らが依存する「親密ネットワーク」[常田 近刊]に着目する。

常田によれば、「親密ネットワーク」は物質＝記号の交換を通じて、村、都市、海外という空間を超えて結ばれる親族や姻族、そして知人・友人などの親密な紐帯を意味する。本稿では、身近な他者を「家族」と意味づけて親密化していく過程で形成されるゆるやかなつながり、として用いる⁵。これまでのフェミニズム研究では、女性が家庭・家族という私的領域に閉じ込められることを抑圧ととらえ、より公的な社会参加を女性の自立ととらえる傾向があった。しかし、本稿では、女性が「家族」のつながりからめとられながらも、むしろそれらを自身の生活戦略や威信のために積極的に活用することが、女性の生の充実につながりうることを明らかにする。

本稿の舞台となるクンブメーラー祭は、ふだんはつながりのみえにくいサードゥの世界における「家族」の制度が最も顕著となる場である。具体的な事例に入る前に、クンブメーラー祭とそこでの主役となるナーガー・サードゥ (*Nāgā sādhu*: 戦闘サードゥ) の組織について概観しておく。

2 クンブメーラー祭

2-1 クンブメーラー祭とサードゥ社会

いまや世界的に有名になったクンブメーラー祭では、サードゥたちがドラッグを吸い合う姿、素っ裸になって行進する大沐浴の映像がインターネットなどで配信されており、日本でも見聞きしたことがある人が少なくないだろう。クンブメーラー祭は、神々と悪魔の戦いの際に不死の霊薬の入ったクンブ(壺)から霊薬が零れ落ちたとされる4都市——ハリドワール(ハルドワール)、アラーハーバード、ナーシク、ウッジャイン——で、12年に一度ずつ順々に(すなわち数年ごとにどこかで)行われる、インドでも最大規模のメーラー(祭)である。特に、占星術をもとに決められる吉日の大沐浴はすべての罪を浄化するとされ、数百万単位の人びとが沐浴に訪れる。祭の行われる2～3ヶ月間、インド各地からナーガー・サードゥたちを中心にさまざまな宗派の修行者が集まる。そうしたサードゥたちを見物に押し寄せる支援者・信者たちやツーリスト、

ジャーナリストや写真家など各メディア、カネ稼ぎに集まる乞食、行商人、それらを取りしきる警察などで、祭の会場となる地域は狂騒じみた群衆の活気に満ち溢れる。

特にナーガー・サードゥにとって、クンプメーラーは社会的にも修行という意味においても最も重要な祭であり続けてきた。ナーガー・サードゥの属するアカラー (*akhārā*) の多くは、シヴァ派ダシュナミー修道組織の系統に属するが、当初出家が正式にみとめられていなかった低カースト出自のサードゥを中心に、イスラーム勢力の侵攻に対抗する戦闘部隊として形成されてきたとされる。クンプメーラーは、特にシヴァ派とヴィシュヌ派のあいだで覇権を競い合う、ナーガー・アカラーの戦闘の場として機能してきた。英国による植民地化以降、宗派間での戦闘は沈静化されてアカラーの軍隊の機能は弱まったものの、現在でもこの祭は、各アカラーのあいだで威信を誇示し、テリトリーの割り振りや大沐浴での沐浴順をめぐって覇権を競い合う場として重要な意味をもっている。また、サードゥ個人にとっても、クンプメーラーは、ふだん離れ離れの師弟集団が集まり、新たに弟子に加入儀礼を受けることでコミュニティを再構築する、数年に一度の重要な時と場所なのである⁶。

人類学・社会学の先行研究⁷では、女性行者の存在について若干触れているものはあるが、彼女たちが祭をどのように経験しているか、詳細を記したものは、管見では見当たらない。実際には、女性行者も祭に参加してきたのだが、あくまでナーガー・サードゥが主役を張る表舞台には、これまであまり目立った形で出てこなかった⁸。以下では、女性行者の経験と実践を記述することで、祭という非日常的空間で顕在化するジェンダーをめぐる問題を抽出する。

2-2 調査地と調査対象

本稿の事例の調査地は、北インドのアラーハーバード (ウッタル・プラデーシュ州=UP州)、ハリドワール (ウッタラーカンド州) の2ヶ所である。

アラーハーバードは別名プラヤグとも呼ばれ、ふだんはさほど観光客もみられない、人口100万人ほどの地方都市である。が、祭の開かれ

る2～3ヶ月のあいだ、ガンジス川（通称ガンガー）、ヤムナー川、（かつて流れていたとされるが今はない）サラスワティー川の三つが融合する合流点に面する広大な敷地に数多のキャンプ群が建設され、またたくまに「クンプのまち」の様相を呈する。一方、ハリドワールは、人口20万程度と規模は小さいが、ヒマラヤ地域の麓、ガンガー沿いに位置し、インド各地からの巡礼者・観光客で常時にぎわいをみせる、インドでも有数の巡礼都市である⁹。本稿では、2013年アラーハーバード・クンプメーラーでの事例を中心に、2010年ハリドワールでの事例、及び2011年8月から2014年3月までハリドワールを拠点に継続して実施したフィールドワークでの事例も、補完的に引用する¹⁰。

本稿が主要な調査対象とするのは、8～9世紀にシャンカラが創始したとされるシヴァ派ダシュナーミー系統、そのなかでも特にジュナー・アカーラー¹¹に属するマーイー（*māyī*:女性行者の呼称）¹²たちである。ダシュナーミーとはギリヤプリーなど「10の名前」¹³を意味する言葉で、ダシュナーミーに属する行者たちはその名を苗字として継承していく。先代のグルの長を起点とし、グルの弟子、その弟子……と下っていくタテ関係と兄弟姉妹弟子などヨコ関係で構成される家父長制的な師弟集団パリワール（*parivār*:家族）を基盤に、さまざまなパリワールから構成される四つのマリー（*maṛhi*:庵や僧院を意味する言葉）¹⁴に分かれ、各マリーの首長・幹部が共同して行政組織を運営し、アカーラーを統治する。

本稿がジュナー・アカーラーの女性行者を主な調査対象としたのは、ほかのアカーラーにも少数の女性行者は存在するものの、マーイーワラー（*māyīvārā*:マーイーたちの居住地）と呼ばれる大規模な女性専用キャンプを有するのはジュナー・アカーラーのみだからである。

3 事例考察—女性行者をめぐる親密ネットワーク—

今回のクンプメーラーで社会的に注目を集めたのが、マーイーワラーが、「ダシュナーミー・サンニャーシニー（*saṁnyāsini*:女性出家者）・ジュナー・アカーラー」と大々的に銘打ち、アカーラー本部とは別個にキャンプを構えたことだった¹⁵。前回のときは、アカーラー本部のキャンプの片隅にマーイー用のテントが何棟かかたまって設置されていただ

けだったが、今回は、もっとも大きな変化として、ナーガー・アカラーの象徴である独自の聖旗 (dharmadvajā) を有する個別の空間を確保したことが挙げられる。また、キャンプの中央スペースには、共有の炉 (dhūnā)¹⁶と台所を設置し、そこでマリーーたちは朝夕の食事、お茶をとることができた。通りに面したふたつのゲートには、常に女性警官と門番役のマリーーが常駐し、不審な男性の入場がある程度制限されたため、確かに安心感はあった。

キャンプ内には約20の大テント、そのほか数棟の小テントが設置されており、200～300人程度のマリーーたちが、マリーやパリワールごとに分かれて居住していた。女性独自のキャンプといっても、そこでの生活は、基本的にグル・パリワール (自身のグルの属するパリワール) を単位として支えられ、動いている。たとえば、事例で挙げるグル・パリワールは、ウッタラーカンド州やネパールなど山岳地域に住むマリーーを多く抱えるため、(パリワール内の有力な男性幹部が出資する) アカーラーへの布施を通じてキャンプ内に数棟のテントを確保していた。以下では、グル・パリワールとそのなかのマリーーたちについて記述する。

3-1 グル・パリワールの女たち

クラリー・バーゲシュワル・パリワール (Kurali Bageshwar Parivār) は、ジュナー・アカラーの14マリーに属する。もともと、パンジャープ州のクラリーという土地が発祥の地だったが、そこからウッタラーカンド州クマーウーン地域にあるバーゲシュワルを拠点とするパリワールが派生したようである。バーゲシュワル・アカラーの前僧院長が約17年前に身罷り、弟子の1人ラーマ・ギリーがほかの兄弟弟子とともにパリワールを率いている。ラーマ・ギリーは高齢で身体が不自由なため、彼の弟子の1人アムリタ・ギリーが、現在バーゲシュワル・アカラーを運営・管理している実質上の長である。

アムリタ・ギリーとその弟子が中心となってパリワールのキャンプを財政的にとりしきっていたのだが、キャンプを支配していたのは男性年長者世代で、そこでの上下関係は絶対的であった。マリーーたちは基本的にマリーーワラーに滞在するが、必ず朝夕の礼拝の後で自身のグル

と年長者たちのもとへ特別な挨拶¹⁷にいかねばならず、男性年長者の後方に陣取って年長者のマッサージや給仕など奉仕 (*sevā*)¹⁸に従事する者もいた。また、マリーワーラーでは、ラーマ・ギリの女性弟子ガウリ・ギリとその姉妹弟子たちを中心に、パリワールの女性たちでかたまって居住・行動した。そこでも目下にあたるマリーは目上の者の奉仕をせねばならなかった。

〈事例1〉チャーチャー（叔父）・グルとそのとりまき

弟子たちは、グルのグルをダーダー (*dādā*：父方の祖父)・グルとして敬い、グルの兄弟弟子や姉妹弟子も、チャーチャー (*cācā*：父方の叔父)・グルとしてグルと同様の敬意を示すべきであるとされる。チャーチャー・グルやダーダー・グル、またはパリワールのなかで特別な地位にあるサードゥなどに対して、初対面または久しぶりに再会するとき、弟子は特別な挨拶をするともにいくばくかのダクシナー (*dakṣinā*：奉納金)を捧げるのが重要な表敬行動のひとつである。新入りとして参加した私の場合、ラーマ・ギリ (グルのグル) と、アムリタ・ギリ (グルの兄弟子)、そしてガウリ・ギリ (グルの姉弟子) に面したとき、グルがこっそり 100 ルピーを手に握らせてそれを渡せといわれたので、従った。あるときには、ガウリの妹弟子にあたるサーラダー・ギリが、「私はあんたのグルの姉弟子だからあんたのグルも同然だ」と主張してダクシナーを要求してきたこともあったため、彼女にも 100 ルピーを渡さねばならなかった。

マーズ月新月の大沐浴のころに、一緒に居住したのは、ガウリ・ギリのテントであった。ガウリ・ギリは、クマーウーン地域を管轄するシュリー・マハントの地位¹⁹にあり、パーゲーシュワル近郊の村のアーシュラム (*āśram*：修行道場)で、グルの奉仕をして暮らしている。彼女のグル、ラーマ・ギリは、脳梗塞で倒れて以来左半身が不自由となり、介助なしには生活が困難な状況である。一時期はしゃべることも困難だったが、現在では日常会話ができるほどには回復した。ガウリともう 1 人の高齢のマリー、近隣の村の支援者たちが彼をサポートしているものの、ガウリ自身 60 代半ばで足腰の痛みを抱えており、グルと自分の奉仕をしてくれる人が欲しい、と愚痴をこぼしていた。そのため、しばしば「オー、チェーリー (*celī*：女性弟子)！ 足をもみなさい」といって、弟子に足をマッサージさせていた。

ガウリはたいいていサーラダー・ギリなど仲良しの姉妹弟子と一緒にいて、

姪弟子にあたる数人のマーイーたち、バーゲーシュワルから一緒にやってきた親戚ほか家住支援者たち、新入りのマーイーなどがそのとりまきをなしていた。グルのもとに朝夕挨拶にはいくものの、滞在は数十分～1時間ほどで、食事はマーイーワラーでとっていた。ある日の午前中、ガウリとサーラダーは、われわれバリワールのマーイーたち4～5人を率いてジャルパーンめぐりに出かけた。ジャルパーン (jalpān) とは、軽食とダクシナーを提供する施食／共食儀礼を意味し、主にサードゥを対象に実施される。ジャルパーンの主催者はそれぞれのテントに招待券を配ったり、知り合いのサードゥが招待券を個人的にくれたりする。われわれは、招待券に記載されていたジャルパーンが行われる会場を探したが、アカラーのキャンプは巨大で混雑しており見つけるのに時間がかかってしまい、到着したときにはすでに終了していた。ガウリとサーラダーの2人は次のジャルパーン会場へと向かったが、10分ほどせかせかと歩いているあいだに、ほかのマーイーたちははぐれたかほかのジャルパーン会場へ勝手に向かったかして、姿がみえなくなっていた。13 マリーのサードゥの主催するジャルパーン会場にたどりつき、菓子と20ルピーのダクシナーを受け取ったのもつかのま、ガウリたちはまた別のジャルパーン会場へと急いでいってしまった。

このように、彼女たちは、グルの奉仕やアーシュラムの日常仕事から解放されて、バリワールのマーイーたちと連れ立って祭を見物したりジャルパーンめぐりをしたりして、楽しんでいるようであった。この様子をみたオーストラリア出身の兄弟子の1人は、ドラッグに酔いながらこんな皮肉をいったものだ。「ほとんどのマーイーは、あたかも母、姉妹、娘からなる家族のように、いっつもかたまってべちゃべちゃおしゃべりしたり、ゴシップに興じたりしてばかり。家長のマーイーがジャルパーンに先導しては、あとでほかの連中から家族のためとかいってダクシナーを巻き上げているんだよ。やつらは世俗一般の女たちとおんなじさ……サードゥじゃない！」

女性キャンプの独立がメディアなどに騒がれたものの、それを女性の「自律」ととらえることにはいくつかの問題がある。

第一に、マーイーワラーの運営に携わる女性リーダーやアカラーで高い地位や権力をもつ女性行者の多くは、有力な男性リーダーの弟子

であったりなんらかのコネがあったりする場合が多く、女性たちは依然として男性の支配や庇護のもとにおかれているといつてよい²⁰。また、彼女たちの多くはジェンダー問題に自覚的とはいえず、女性たちの小集団はみられたもののそれらはばらばらで、統一された女性の連帯に結びつきうようにはみえなかった。

事例1でみたように、女性行者の多くは、実際、経済的にも精神的にも、グル、そしてきわめて家父長制的なパリワールという制度・共同体に依存して暮らしている。パリワールにおいて、女性は男性の後方に位置づけられ、主導するのは常に男性である。しかしながら、マリーワーラーでは、「姉妹」や「叔母」「姪」のあいだで交流し、ダクシナーの贈答やともに祭を楽しむことを通じて、女性メンバーによる親密ネットワークを形成していることもわかった。年長者は目下の者に奉仕をさせたりダクシナーを献上させたりすることで、自らの威信を高め、目下の者はそれによって女性たちの親密ネットワークに居場所を確保できる。また、雑用やマッサージなど奉仕をすることは、重要な修行の一部と考えられている。こうした地道な関係づくりが、その後の日常の修行生活での何かの集まりの際に、また次のクンプメーラーで、大切になってくるのである。

3-2 マンダリーの女たち

一方、アカラーに属していても、組織とのつながりが弱く、マリーワーラーに居場所がないマリーたちもいる。そうした周縁的なマリーたちの集まりのひとつが、ハリドワールのガンガー沐浴場沿いの掘立小屋集落に暮らす、レスラー・バーバーの率いるマンダリー (mandali) だった。

マンダリーとは、集団を意味するが、ハリドワールでは特に朝の集団托鉢で構成される行者集団とその托鉢実践を指す。レスラーのマンダリーは、レスラー (50代、ラージャスターン出身) をリーダーとして、14マリーの有力なサードゥである彼のグルの弟子たちを中心に、男女から構成される。人数は季節や状況によって変動するが、アラーハーバードに向けて出発したときは、17人のマリーと12人のバーバーが参加した。

祭のあいだ、われわれが滞在したのは、アカラー本部のあるNo.4セクターから歩いて1時間以上離れたNo.13セクターにある、女性行者Gが運営する個人キャンプだった。彼女自身はどのアカラーにも属しておらず、宗派や教団組織の別を問わず、祭のあいだ泊まる場所や食事がないなど困った人たちを助ける目的でキャンプを設置したという。われわれマンダリーー行は、50人ほど収容できる藁の敷かれた大きなテントに、それぞれ持参してきた毛布を敷いて自分の寝床をつくり、翌日からの托鉢に備えた。

〈事例2〉前日一女ボスとそのとりまき―

マンダリーーは男女に分かれて隊列を組むことになった。レスラーがバーバーたちを率いたのに対し、マリーーたちを率いたのは女性マンダレーシュワル(*maṇḍalēśvar* : マンダリーの長) 役のラーダーだった。また、しんがりとなって後ろからマリーーたちを統率・注意する警官役は、ラーダーの姉妹弟子でいつもおそろいの服やショールを身につけているクリシュナーが務めることになった。

ラーダーは、UP州の出身で、(本人は28歳というが) おそらく30代後半かそれ以上。掘立小屋集落で暮らすようになってからまだ3年と、それほど古株ではないが、60～70代の高齢の寡婦が大半を占めるマンダリーーのマリーーたちのなかでは若い方で、人目をひく肉付きのよい美人である。汽車のなかでも、キャンプでも、彼女のそばをびったりとくっついて離れないのが「ちび」と呼ばれる小柄な男性で、ほかの人びとは「ラーダーのダンナだ」と話していた。クリシュナーもUP州出身でまだ若いほうで、もともとはアカラーの女性幹部の弟子だったが、彼女といさかいを起こして逃げ出し、やはり数年前にマンダリーーの集落に流れ着いたようだった。彼らと、ラーダーの妹弟子たち、彼らが「パパ」と呼んで慕っている、近郊の州都からハリドワールに時々通ってきているらしい気前のよいバーバーなど5～6人がたいてい一緒にいて、食べ物に分け合ったり、かたまって寝たりしていた。

翌日、レスラー、ラーダー、ちび、クリシュナーなどマンダリーーのうち13人が、朝の集団托鉢の受け入れ交渉をする目的で、施食(*kṣetra*) 会場の視察に出かけた。われわれは10ヶ所以上キャンプをまわったが、数日後のマカ

ル・サンクラーンティ（1月14日）の大沐浴以降に施食を開始するというところで、まだやっていないところが多かった。受け入れがみつめられた場合、マングレーシュワルと構成員の名前が書かれた名簿を提出しなければならない。なかには、男性マングリーのみ可で女性は受け入れない、というところも少なくなかった。施食の担当者と交渉するのもレスラーほか男性の役割で、女性たちはその間、外に座ってタバコを吸ったりアラ－ハーバード名物のグッパを買い食いしたり、おしゃべりしたりしながら待つしかなかった。途中からは、マーイーを残して、レスラーとちびほか3～4人のバーバーだけで交渉にいてしまい、結局交渉の結果がどうなったのかもよくわからないまま、三々五々散らばってキャンプに戻っていった。

〈事例3〉マングリー実践—女たちは「母だ」と主張した—

その翌朝、いつのまにかバーバーが20人、マーイーが15人と増えていたマングリーは、朝7時にキャンプを後にしてガンガーを越えてNo.12セクターへ向かった。レスラーがバーバーたちを先導し、ラーダーがそれを追うかたちでマーイーたちを先導し、最後尾にクリシュナーがついた。まず、われわれは「聖苦行者ブーランダース師のアーシュラム」という個人キャンプを訪ねた。バーバーたちが前に、マーイーはその後ろに従った。われわれは行列をつくり、「シュリー・ラーマ、ジェイ・ラーマ、ジェイ、ジェイ、ラーマ……（聖なるラーマ神に万歳）」と神の名を繰り返し唱和しながら、1人ずつ机に並んだ支援者から平焼きパン、豆スープ、揚げ菓子、20ルピーとキャラメルを手渡してもらった。終わるやいなや、われわれは向かいの「ハレ・ラーマ・アーシュラム（ウダーシーン・アカラー）」のキャンプへと急ぎ、そこでもパン、豆スープ、野菜カレーなどをももらった。

それからわれわれは、次の施食会場「グルの恩恵のアーシュラム」へ向かうとずいぶん歩いたのだが、先導していたちびが道に迷ったようだった。仕方なく、引き返して別の会場に向かうことにした。小一時間歩き、ようやくあての「聖ニッティヤナンダの施食会場」に到着した。バーバーたちが先に入り、マーイーは門のところで待つように指示されたので従った。支援者男性の1人がブラサード（*prasād*: 供物のお下がり）の菓子を配りに出てきたのだが、マーイーたちは「私たちは外では施しを受け取らないよ!」「先にマングレーシュ

ワルに渡すんだよ！」といって受け取ろうとしなかった。長いこと歩いてきて疲れていたこともあった。マーイーの何人かが怒ってその男性に詰め寄った。「なんで私たちを中に入れないんだい？！　こんなに歩きとおしてここまで来たっていうのに」。すると、彼は困ったように答えた。「これ（施食）はサント（sant：修行者）のためなんですよ」と。彼の言葉は火に油を注ぐこととなった。マーイーたちは怒鳴り出した。

「私たちはマーター（mātā：母、女神）だよ！　みんなマーターに敬意を示しているっていうのに」。

すると、男性は気を悪くしたようで、「あんたたちが二度とこれられないようにいつけてやる」と言い捨てて中に引っ込んでしまった。

その後、ちびが出てきて、マーイーだけでなく、バーバーたちももう来ないように言い渡されたと、暗い表情で言った。彼は、マーイーたちに、施食のときは離れた場所で待つように、バーバーたちが出てきてから中に入るように、と改めて注意した。たった 20 ルピーのダクシナーしか手にできず（それは明らかに期待していたよりも少ない額だった！）、われわれは肩を落として帰路に着いた。

事例2でみたように、マンダリーの女性たちもまた、パリワールとはちがったかたちで「家族」という制度に依存している。ラーダーだけではなく、女性たちのほとんどは夫と死別したり捨てられたりした人びとであり、マンダリーで新たにパートナーをつくって、夫婦のように共同生活しているケースが少なくない²¹。さらに、同じ集落に住むご近所や姉妹弟子、仲良しのマーイーと「母」「姉妹」「兄嫁」と呼び合うような親密ネットワークを形成して、互いに食事を分け合ったり、病気のときや困ったときに助け合ったりするなどケアし合っている。

一方、事例3から明らかになったのは、托鉢する女性は「修行者」とみなされない、というジェンダーに基づく差別の実態だ。これは、女性行者は一般に、「寡婦」とみなされやすく、実際そういうケースが多いという事情がある。しかし、後でわかったことだが、少なくとも祭のあいだだけは、女性もまた独自のマンダリーをつくり、堂々と会場を闊歩することができるのだ。というのも、ハリドワールの日常の集団托鉢で

は、女性は正規のマングリーに入れてもらうことさえ認められていないからである²²。次のようにもいえよう。祭のあいだ、女性たちは僧衣を着て隊列を組んで練り歩くことで「女性もまた修行者である」というメッセージを発信し、施食会場に入れようとしなかった男性支援者に対しては、「私たちは母だ」と抗議した。女性行者たちの雑多にみえる集まりは、クンプメーラーという特別な場で、女性が声を上げるための微力な拠りどころとなってくれるのである。

3-3 もうひとつのマーイーワラー

女性行者のなかには、自らアカラーを離れて、自由にやりたいことを実践するために独自のキャンプを設営する者もいる。最後に、2010年ハリドワールのクンプメーラーで出会った、女性行者による女性のための社会奉仕活動を取りあげたい。

〈事例4〉チャンディーの社会奉仕活動

クンプメーラーを契機に、新たな女性のためのアーシュラム「マーイーワラー」を始めようとしている女性行者たちがいた。中心となって活動しているのはチャンディー・サラスワティーとそのパートナーのバーバー。彼女は現在57歳で、生まれも育ちもハリドワール。家族は、亡くなった父と、母と、兄弟4人。12～13歳のころに親が決めたので結婚をした。2人の息子がいるが、今は結婚してデリーに暮らしている。昔からジュナー・アカラーの僧が住むマーヤー・デーヴィー寺院に通っているなかで、アカラーの高僧だったグルとであい、20年前に夫とともに出家を受けた。何故出家したのかと尋ねると、「気持ち自然に起こったからです。社会の奉仕をしよう、神の瞑想をしよう、と」と答えた。家族もみな出家に賛成してくれたそうだ。夫との関係はそのときにおわり、兄弟弟子となったというが、現在でも一緒にアパートメントで暮らし、ともに行動する。

彼らは3年ほど前から、シュリー・サードヴィー・パリワール（聖なる女性行者の家族）という組織をつくって、女性のための社会奉仕活動を始めた。当初は、寡婦や身寄りのない女性、孤児の女の子が亡くなったときなどに、死者儀礼を行ってきた。3年前にグルが亡くなってからは、彼女が新たにグルと

仰ぐ、13アカラー連盟の長であるヴィシュヌ派の高僧の賛意を得ているほか、近くに住むさまざまな宗派の数人の女性行者も、彼女の活動に協力している。マーイーワラーでは、祭のあいだだけではなく、その後も続けて、貧しい女性や、家族のいない女性、寡婦、子どもに家を出された女性、孤児の女の子、あるいは1人で生きる女性行者たちのために、住居や食べるもの、衣服、教育を供給することをめざしているという。この国では女性が搾取されているから、女性を守るため、誰かが運動に火をつけなければならない、と、チャンディーは熱心に語った。

「私は、マーイーワラーを、ヒンドゥー教徒だけでなく、ムスリムもクリスチャンも仏教徒も、ヨーロッパ人もアメリカ人も日本人も、あらゆる女性のための住処にしたいのです」「私にとって、あらゆる女性は娘同然ですから、私のキャンプに住まわせて、安全に暮らせるようにしたいのです」。

一方、チャンディーの生活は家族の経済的支援を受けており、マーイーワラーの運営も、兄たちやイトコや姪、甥など多くの親族が、さまざまな形で彼女の活動を支援しているなど、親族とのあいだに密接なつながりがみられた。台所仕事や雑用を手伝う姪は「私たちはみんな彼女の弟子になった」という。一般には、サンニャーシン (*saṃnyāsin*: 出家者) は親兄弟や親族とのつながりを維持すべきでないと考えられているため、あるときチャンディーに、「サンニャーサ (*saṃnyāsa*: 出家) というのは、世俗社会を放棄することではないのですか？」と尋ねたことがある。すると、彼女はこう答えた。

「私の考えでは、サンニャーサは世俗社会を捨てることはありません。ふつうの人は、家族は限られているけれど、サンニャーシンにとっては、世界のすべてが家族になるんです。サンニャーシニーはすべての母になるんですよ」²³

チャンディーを中心とする社会奉仕活動には、宗派の差異を超えてさまざまな女性行者、協力者たちがかかわっており、そこには家出してきた寡婦や身寄りのない巡礼者家族、1人で巡礼を続ける女性行者など、多様な背景をもつ女性たちが集まってきた。その一方、彼女の活動の大部分は親族の支えに拠っていたりパートナーと共同生活していたりするなど、彼女もまた血縁・婚姻関係からなる親密ネットワークに依存している。しかし、彼女の倫理では、「家族」は限られたものではなく、す

すべての他者を「娘」や「息子」として愛することで、「世界のすべてが家族になる」といい、自身は「すべての母」になるという。物質的・身体的には身近な親密ネットワークに依存しながら、理想的な言説を語ることで、彼女はそれをポジティブに意味づけなおし、さらにそれを拡張しようとしている。

理想は、力をもつものだ。マニーワーラーの活動は、内部での決裂などもあって、うまくいっているとはいえなかった。しかし、彼女は、こうした社会奉仕活動は、対象となる女性のためだけではなく、「奉仕することで、魂の充実が得られるからです。歓喜 (ānanda) が得られるからです。奉仕は、神への奉仕なのです」とも語っていた。理想は、修行者であることを正当化したり生活基盤を確保したりするためだけに語られるわけではなく、かといって人は理想通りに生きられるわけでもない。それでも、矛盾を引き受けて現実と折り合いをつけていくために、他者に依存しながら修行者として自由であるために、「家族」をめぐる理想は力強く語られるのである。

4 結論に代えて

本稿では、クンプメーラー祭を舞台に、女性行者をとりまくさまざまな親密ネットワークのありようを検討してきた。その結果、明らかになったのは、第一に、女性行者もまた、家住女性と同様に、「家族」に束縛され、物質的・精神的に依存していることだ。パリワールという家父長制的な師弟集団 (事例1)、婚姻関係またはそれに近いパートナーシップや近所づきあい (事例2)、既存の血縁に基づく親族関係 (事例4) など、そこでの関係性のレベルは複層的だが、女性が世俗を捨てて生きていくうえで、「家族」というかたちでの支えが必要不可欠となっている。それはまた、時に男性による暴力や、性的嫌がらせ (の前提にある女性蔑視)、料理や洗濯など家事役割を押し付けられ私的領域に閉じ込められるなど、女性の抑圧にもつながるものだ。

その一方、女性たちはむしろ積極的に「家族」に依存し、自己の威信や生活のために活用したり、その関係性を女性主体でつくりかえたりしようとしている。たとえば、パリワール内部で男性たちとは独自の女性

メンバーによる「姉妹」「叔母」「姪」の連帯をつくる（事例1）、女性だけのマンドリーをつくって修行者性を主張する（事例3）親族や身近な他者に依存しながら女性のための社会奉仕活動を実現させようとする（事例4）など、自分たちが生きる場や生きる喜びを獲得するために、具体的実践と理想的言説のあいだで関係性を拡張・再構築しているともいえる。

本稿では、女性行者たちが絡めとられる社会的しがらみと、そのなかで生活上の便宜や修行上の意味を見出そうと模索する姿を、「家族」に着目して描き出そうとした。そうした親密ネットワークのより具体的な動態や、それらがどのように現実のジェンダー差別や暴力の問題に対抗する力となりうるかについては、今後の課題とする²⁴。

付記・ヒンディー語表記については、初出はイタリック体で表記した。サンスクリット由来のヒンディー語表記については、サンスクリット表記を使用した。固有名詞や地名については、基本的には『南アジアを知る事典』（2002）に準じている。ただし、宗派や組織の名称など、一部は現地語発音に近い表記を用いた。また、本稿でとりあげる人物名には、公的な人物や著名人を除いて、仮名を使用した。

本稿にかかわる現地調査では、2009年度日本学術振興会「若手研究者国際・トレーニング・プログラム（ITP）」による支援、2010年4月～2013年3月まで日本学術振興会特別研究員（DC1）として支援を受けた。

註

- 1 たとえば、常田はこれまでのインド女性研究の傾向を、1) 価値における女性の劣位性、2) 社会経済的な差別や抑圧、3) 女性の吉祥性や豊穡力に着目したもの、の三つに分けて説明している [2011: 12-15]。
- 2 女性の占める割合は修行者全体の10～15%とされる [Gross 1992, Hausner 2007]。
- 3 伝統的なブラフマニズム文献などで強調されてきた、人生否定的態度を基盤とする知識重視の修行主義を指す。
- 4 [Khandelwal 2009]など参照。ただし、ここでいう階層や格差とは、修行者の出身地や現在の住居、教養の程度、結婚歴、修行年数や組織内での地位など、さまざまな基準に拠って形成される、状況依存的なものである。この問題の詳細については、別稿で論じることとする。
- 5 サードゥーは一般に、世俗社会を捨てた現世放棄者と位置付けられ、家住者のように家族・家庭はもたないとされる。そうした前提に対し、本稿ではカーステンのrelatednessをめぐる議

- 論 [Carsten 2000]を参照枠として、親族タームの使用や宗教的理想などローカルな「家族」の言説と、食事や居住を共有していく実践との相互作用で形成される、親密な「関係である」様態を抽出・提示するねらいがある。
- 6 以上のクンプメーラー、アカラーにかんする記述は、[Dubey 2001]、[Ghurye 1953]、[Hausner 2007]、[Narain and Narain 2010]、[田中 2005]などを参照。
- 7 たとえば、[Sinha and Saraswati 1978]、[Tripathi 2004]、[田中 2005]、[Hausner 2007]などを参照。
- 8 一方で、近年、有力な女性行者のなかで、伝統的な男性優位の社会構造を乗り越えて、女性の自律のための運動を牽引していくような動きが顕著である。たとえば、VHP (世界ヒンドゥー協会)の女性支部であるSSP (女性行者の聖なる力協会)は、1995年以来クンプメーラーで毎回大規模な女性会議を主催してきた。しかし、本稿ではこうしたヒンドゥー・ナショナリズムと結びつきの強い女性運動は扱わない。
- 9 もともとはアカラー間の競合の激しかったハリドワールでクンプメーラーが開かれていたが、英国による植民地化とそれに対抗して活発化するナショナリズム運動の動きに伴って、毎年アラールハーバードでマーズ月 (1～2月)に開かれるマーズメーラーがクンプメーラーと称されるようになった、という指摘もある [MacLean 2008]。
- 10 2010年1月から3月にかけて約2ヶ月間、ハリドワールで博士予備論文執筆のため聞き取り調査などを実施。その後、2011年8月から博士論文執筆に向けて長期フィールドワークを開始。その過程でジュナー・アカラーの男性グルのもとに弟子入りし、2013年1月から2月にかけて1ヶ月、2回に分けて、アラールハーバードで参与観察調査を行った。
- 11 ジュナー・アカラーが形成されたのは12～13世紀初頭、ウッターカンド州のカルナブラヤグを発祥の地とする [Hartsuiker 1993, Clark 2006]。現在はワラーナシーを筆頭に、ウッジャイン、ハリドワールなど北インド各地に拠点を有する、シヴァ派7アカラーのなかでも最大規模集団とされる。
- 12 女性行者は、一般的に、「マーター」「マイー」「マー」など、「母、女神」を表す呼称で呼ばれる。それらは地域や宗派によって異なるが、ウッターカンド、及びジュナー・アカラーでは特に「マイー」と呼ぶことが多いため、事例の記述ではフォークタームとして主に「マイー」を使用する。それに対して、男性行者は「バーバー」と呼ばれる。
- 13 アーランヤ (森)、アーシュラマ (住まい)、バーラティー (勉強)、ギリ (丘)、バルヴァト (山)、プリー (まち)、サラスワティー (真知)、サーガラ (海)、ティールタ (渡し場)、ヴァナ (森)。
- 14 バーラティー系とサラスワティー系パリワールで構成される4マリー、ギリ系パリワールで構成される13マリー、同じくギリ系パリワールで構成される14マリー、プリー系パリワールで構成される16マリーの四つである。
- 15 たとえば、BBC ニュースは「ヒンドゥー女性出家者が独自の空間を確保した」と報じ、リーダーとされる女性行者にインタビューしたり (彼女は「新たなアイデンティティのしるし」と語っている)、男性とちがって女性行者が大沐浴の際に裸になれないことに疑義を呈したりしている。(2013年1月27日付、<http://www.bbc.com/news/world-asia-india-21119340>)
- 16 サドゥグが日々の礼拝や煮炊き、暖をとるのに用いる火や煙、及びそれが焚かれる場所を指す。

- 17 グルにあたる目上の人物、及び神像などへの挨拶は特に、オーンカール (*omkār*) と呼ばれる独特な所作でもって行われる。手順は以下だ。まず、グルの目を見つめながら (グルもまた弟子の目を見つめる)、両足を開いてしゃがみこみ、親指は開いたまま残りの指で拳をつくって両方の親指と拳を合わせて地面につける。拳を開いて、親指をそれぞれ小指、薬指、中指、人差し指、親指同士とくっつけていきながら、順番に “*Om, guru-jī* (*jī* は「さま」にあたる敬称の接尾語)” “*Om, dev* (神)-*jī*” “*Om, datta* (ダッタットレーヤー神)-*jī*” “*Om, alakh* (シヴァ神)-*jī*” “*Om, swami-jī* (僧への敬称)”と胸の内でも唱える。一連の動作を5回繰り返した後、両手を三度交差させて地面につけた拳の親指に第三の目があるとされる眉間を押し付けながら、“*Om namo nārāyaṇ* (ナーラーヤナ神に敬意を表すという意味)”と、大きな声で唱和する。
- 18 奉仕 (*sevā*) とは、具体的にはグルの身の回りの世話や、掃除・料理などあらゆる雑用を含み、特にグルへの奉仕は修行の一環として最も重要であると考えられている。こうした師弟関係における奉仕の重要性については、別稿 [濱谷 2011] も参照されたし。
- 19 アカーラーの位階のひとつで、聖僧院長、という意味合い。ただし、アカーラー本部の閣僚にあたるシュリー・マハント、地域管轄のシュリー・マハントと2種類あって、女性が就けるのは後者だけであり、実際のアカーラー行政にはかかわっていない。
- 20 たとえば、マリーワーラーのリーダーを務めたマリーは、実質的に今回の女性キャンプ独立に動いたアカーラーの男性幹部が、自身と懇意であった彼女を推したため、出家歴が浅いにもかかわらずほかのベテランの女性幹部たちを差し置いて長の座に就いたと噂されていた。
- 21 一般に、特にシヴァ派行者は、結婚はもちろん異性と性的関係をもつべきでないと考えられているが、実際、ハリドワールの地域社会で暮らす少なからぬ女性行者は、「マハーラージ (主人)」と呼ばれるような男性パートナーと暮らしていたりする。こうしたパートナーシップの問題については、別稿で扱う。
- 22 ハリドワールにおける、マンダリーを含めた女性行者の托鉢実践について、詳しくは別稿で扱う。
- 23 こうした言説とカトリック修道女など他宗教の女性出家者との共通性、あるいはヒンドゥー女性行者の特殊性については、今後の考察の課題とする。
- 24 ヒンドゥー宗教者による在地のフェミニズム運動について、たとえばバップの論考など参照 [Babb 1984]。本稿でとりあげたような、周縁的な女性行者たちのささやかな実践が、在地のフェミニズムにどのように接続しうるか、今後検討していきたい。

参考文献

- Babb, Lawrence A., 1984, “Indigenous Feminism in a Modern Hindu Sect”, *Signs*, 9-3, pp. 399-416.
- ジュディス・バトラー、本橋哲也(訳)、2007 (2004), 『生のあやうさ―哀悼と暴力の政治学―』、以文社。
- Carsten, Janet, 2000, “Introduction: Cultures of Relatedness”, In Carsten, Janet (ed.), *Cultures of Relatedness: New Approaches to the Study of Kinship*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, Matthew, 2006, *The Dasanami-samnyasis: The Integration of Ascetic Lineages into an Order*, London:

Brill.

De Napoli, Antoinette, E., 2009, "‘Leave Everything and Sing to God’: The Performance of Devotional Asceticism by Female Sadhus of Rajasthan", Ph. D. thesis submitted to the Emory University
Dubey, D. P., (ed.), 2001, *Kumbha Melā: Pilgrimage to the Greatest Cosmic Fair*, Allahabad: Society of Pilgrimage Studies.

Ghurye, G.S., 1953, *Indian sādhus*, Bombay: Popular Book Depot.

Gross, Robert Lewis, 1992, *The Sadhus of India: A Study of Hindu Asceticism*, New Delhi: Rawat Publications.

濱谷真理子、2011、「サードヴィーとして生きる—現代インド社会における奉仕実践と師弟関係の一考察—」、『現代インド研究』、1、145-157頁。

Hartsuiker, Dolf, 1993, *Sādhus: Holy Men of India*, Singapore: Thames and Hudson.

Hausner, Sondra. L., 2007, *Wandering with Sādhus: Ascetics in the Hindu Himalayas*, Albany: Indiana University Press.

Khandelwal, Meena, 1997, "Ungendered Atma, Masculine Virility and Feminine Compassion: Ambiguities in Renunciant Discourses on Gender", *Contributions to Indian Sociology*, 31-1, pp. 79-107.

Khandelwal, Meena, 2004, *Women in Ochre Robes: Gendering Hindu Renunciation*, Albany: State University of New York Press.

Khandelwal, Meena, 2009, "Research on Hindu Women's Renunciation Today: State of the Field", *Religion Compass*, 3/6, pp. 1003-1014.

川橋範子・黒木雅子、2004、『混在するめぐみ—ポストコロニアル時代の宗教とフェミニズム—』、人文書院。

Maclean, Kama, 2008, *Pilgrimage and Power: The Kumbh Melā in Allahabad, 1765-1954*, New York: Oxford University Press.

Narain, Badri and Narain, Kedar, 2010, *Kumbh Melā and The Sādhus: The Quest for Immortality*, Varanasi: Pilgrims Publishing.

Ojha, Catherine, 1981, "Feminine Asceticism in Hinduism: Its Traditions and Present Condition", @ *Man in India*, # 61-3, pp. 254-285.

Ojha, Catherine, 1985, "The Tradition of Female Gurus", *Manushi*, 31-2, pp. 2-8.

Sinha, Surajit and Saraswati Baidyanath, 1978, *Ascetics of Kashi: An Anthropological Exploration*, Varanasi: N K Bose Memorial Foundation.

田中裕士、2005、「南アジアにおけるサードゥーの苦行実践と現代社会」、京都大学提出博士予備論文。

常田夕美子、2011、『ポストコロニアルを生きる—現代インド女性の行為主体性—』、世界思想社。

常田夕美子、近刊、「空間の再編と社会関係の変容—農村、都市、海外をつなぐ親密ネットワーク—」、三尾稔・杉本良男(編)、『現代インド6 環流する文化と宗教』、東京大学出版会。

Tripathi, B. D., 2004, *Sadhus of India: The Sociological View*, Varanasi: Pilgrims Publishing.

要旨

本論文の目的は、インドのクンブメーラー祭を舞台として、ヒンドゥー女性行者が修行者社会におけるジェンダー差別や抑圧をどのように受け止め、生きる場や生きる喜びを獲得しようとしているか、「家族」として意味づけられる親密ネットワークに着目して明らかにすることである。事例考察によって、女性行者もまた家住女性と同様に、家父長制的な師弟集団や、血縁に基づく親族、男性パートナーなど、物質的・精神的にさまざまなレベルの「家族」に依存していることがわかった。その一方、自己の威信や集団内でのポジショニングのため、生活していくために「家族」を活用する、あるいは女性が生きやすいようにそれらを再構築しようとする姿もみとめられた。そうした「家族」への依存や再構築を通じて、女性行者たちが絡めとられる社会的しがらみと、そのなかで生活上の便宜や修行上の意味を見出していこうと模索する姿を、本稿では描き出そうとした。

Summary

In Search of 'Family' Support:

Intimate Networks of Female Ascetics in Kumbh Melā, Contemporary India

Mariko HAMAYA

The aim of this paper is to explore how female Hindu ascetics can obtain their places in society, and achieve happiness and well-being, focusing on their intimate networks which they call 'family'. Female Hindu ascetics are suppressed in male-dominated Indian society. The author conducted a field study in Kumbh Melā. She has found out that they depend on various forms of 'family', not unlike female householders. This 'family' consists of various actors, including patriarchal guru-disciple relations, kinship relations and male-partners whom they live with. The ascetics also try to make good use of the 'family' and re-construct it in order to make their living easier and to achieve their prestige in the society. The 'family' of female ascetics is a form of social bond. The author attempts to describe the ascetics' struggle for better living, using the framework of the dependence and re-construction of 'family'.